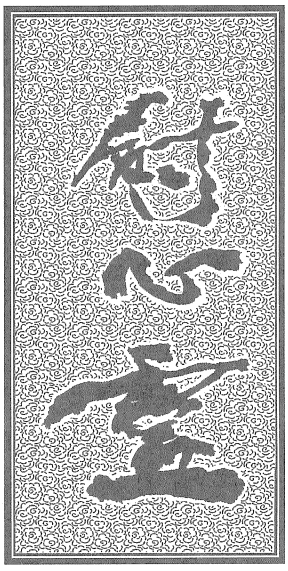


題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 14 号

財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒105-0014　港区芝2-5-19
TAビル４階

電　話　03（5730）0421
ＦＡＸ　03（5730）0422

http://homepage2.nifty.com/ireikyou

振替口座　00140-6-334930

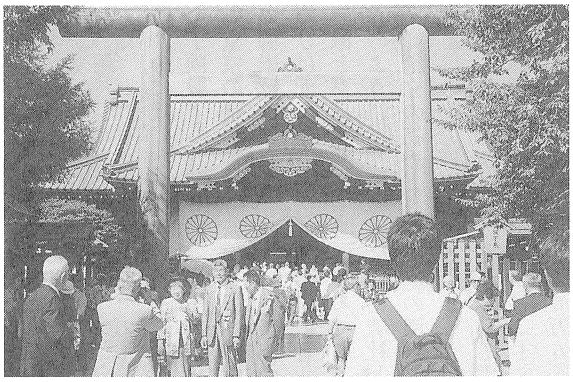
編集人　飯田正能
発行人　柚木文夫
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

目次

靖國神社とアーリントン国立墓地 …… 1
靖國神社宮司に京極高晴氏就任 …… 4
「遺骨収集・軍人墓地の管理は国の責任」と厚生労働大臣明言 …… 5
戦没者慰霊顕彰事業の現状と問題点 …… 7
平成21年度千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式 …… 8
第43回特攻殉国者慰霊祭 …… 10
遺烈 …… 11
事務局からの報告等 …… 14

靖國神社とアーリントン国立墓地

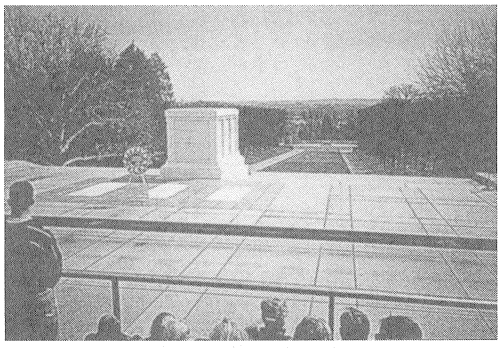
今年は、靖國神社御創立百四十年の節目の年である。大方御承知のとおり、靖國神社は、明治2（1869）年6月29日、戦没者の御名を万世に伝え、その神霊を慰めんとの明治天皇の思し召しにより、九段坂上に祀られた「招魂社」に始まり、その後明治12年6月4日、「靖國神社」の社号と別格官幣社の社格が与えられた。



8月15日の靖國神社社頭

アーリントン国立墓地。戦死者だけでなく、ケネディ大統領など国民的英雄の墓もある。

その明治2年6月29日から7月3日まで5日間にわたって齋行された第1回招魂祭の第一日目には、朝廷御差遣の勅使を迎え、「知官事」の宮（仁和寺宮嘉彰親王、後の小松宮彰仁親王）を始め、新政府の大官、華族、各藩代表者、一般参拝者等が参列して厳粛盛大に挙行され、祝砲、奏楽も行われたという。翌6月30日にも祭典が挙行され、奉納相撲も催された。この後続いて7月1日、2日、3日と合計5日間にわたって齋行され、最終日には昼夜花火の催し等があって群衆が殺到したということであり、今日の例大祭や「みたままつり」を彷彿とさせる。この第1回の招魂祭の後、明治3年6月から、ほぼ現在の場所での社殿の本建築に取り掛かり、明治5年5月10日に完成したとのことである。



アーリントン国立墓地の西南高台にある無名戦士の墓

今年の春季例大祭は、4月21日から23日までの3日間厳粛に執り行われ、21日の「清祓」、22日の「当日祭」、23日の「第二日祭」と「直会」の諸祭事が滞りなく齋行された。

22日の「当日祭」は、午前10時から齋行されたが、午前10時30分には、参列者一同が奉迎申し上げる中、唐橋在倫掌典が勅使として参向し、御幣物を

奉献、その後、大御心のまにまに御祭文が奏上された。また、午後1時30分には三笠宮寛仁親王殿下が昇殿参拝された。翌23日の「第二日祭」の午後1時30分には、三笠宮崇仁親王、同妃百合子両殿下も親しく御参拝になられた。御皇室の靖國神社にお寄せ下さる格別の御崇敬は誠に有り難く、御祭神のお慶びは元より、御遺族始め崇敬者一同感激と喜びを共にするところである。このように、靖國神社は、招魂社として御創立の初めより、皇室の深い御崇敬を辱くしている。

靖國神社御本殿に祀られている霊璽簿記載の御祭神は、嘉永6年（1853年）の黒船来航以来246万6千余柱であり、その中には女性5万7千余柱、当時日本人であった朝鮮・台湾の出身者8万余柱も含まれている（その中には、台湾の李登輝元総統の兄上も含まれている）。また、御本殿内の相殿には、内々陣へお遷しするまでの御霊（千鳥ケ淵戦没者墓苑の御遺骨を含む）が祀られているから、当然、慰霊・祭祀の対象となっている。したがって、靖國神社には、戦死又は戦病死した軍人・軍属（従軍看護婦・船員・報道員等）を始め、準軍属（民間防空員・勤労動員学生・女子交換手等）や国の為に殉じた幕末の志士、法務死者（靖國神社では昭和殉難者と称されている）等の方々も祀られている。また、御本殿に向かって左側の回廊外側には二つの社殿があって、そのうち右側の御社は「元宮」といい、文久3年、幕末の志士の御霊を、幕府にかくれてお祀りするため、少数の有志により京都に建立された招魂社の元をなす小祠で、昭和6年に奉納鎮座された。その左側の「鎮霊社」（昭和47年創建）には、西南の役などの国内戦で賊軍となり、戦没された方々（西郷隆盛他）並びに全民間の戦禍犠牲者の御霊と共に、国籍を問わず万国（米・英・仏・支他）の戦没者・戦禍犠牲者の御霊が祀られている。この二社は、宮司始め神社職員により、毎日の御勤めが行われている。したがって、戦没者墓苑にお預かりしている御遺骨も、将来にわたって収集のすべのない空中散華者や海底深く眠る御遺骨も、また、それぞれの墳墓に眠る御遺骨も、全てその御霊は靖國神社に祀られているのである。

靖國神社では、日本の伝統に基づいた祭祀が行われている。それはもとより、古来「神道」と言われる方式と精神に基づいている。先ず、「神道の方式」であるが、神前に詣でるには、身を清める為に、禊ぎとして、手を洗い口をすすぎ、心を清める為に、お祓いを受けて邪心、悪霊を払い除き、清明心で臨む。

神前では、「二拝二拍手一拝」の礼を行う。「二拝というのは、英霊の心を受けとめますという誓いの挨拶であり、二拍手はそこに集まった者が、みな一つ心になることだ。そして、最後にもう一回礼拝して締める。縦と横、すなわち英霊と参列者を一つに調和させることであって、十字を切るのと同じではないか」と。これは、後掲の故名越二荒之助先生流の解釈であるが、誠に外国人にも納得しやすい説明である。

また、「神道の心」について、靖國神社の社報『靖國（やすくに）』第647号（平成21年6月1日発行）の巻頭言とも言うべき「靖涛」欄に、次のように述べられている。

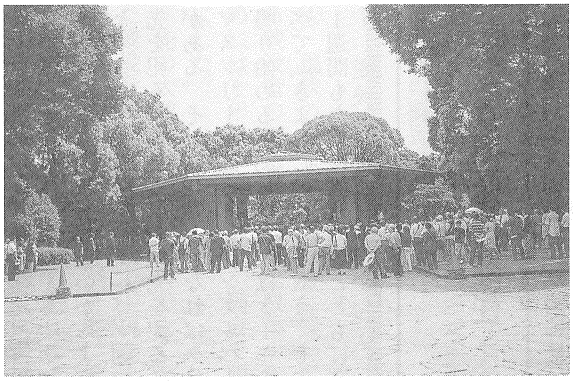
「「神道の心は何か」と問われて、おそらく神職であるならば「清浄」、「正直」と答えるのが常であろう。「凡そ神は正直を以て先きとなし、正直は清浄を以て本となす」（『神道簡要』）といった言葉や、「みな人の　こころもみがけ　千早ぶる　神のかゞみのくもる時なく」（後醍醐天皇）といった御詠からも、日本人が「清浄」、「正直」の二徳をことのほか重要視してきたことが窺われる。神の鏡といえば、靖國神社には御霊代として奉安されている神鏡とは別に、本殿階に据えられた大きな神鏡がある。これは明治十年十一月十四日、西南戦争戦没者の合祀臨時大祭にあたり明治天皇より御献進のあった幣帛料で製作されたもので、黒檀の鏡台には菊花、桐葉に鳳凰と双龍の彫刻が施されている。「なき父の神霊がうつる」とも言われるこの神鏡は、参拝者の視線から御神座を遮る役割を果たしているが、これに正対した参拝者には少なからず、神の鏡の曇る時なきが如く、人も心を磨いて常に努力することの大切さを諭してくれる。そんな役割をも有している。「正しくする」とは誠一途に生きること、「直くする」とは悪を反省し、少しでも善い方に向かおうと努力することと先人は説いているが、正直の本をなす清浄、心の清らかさを保持するのはなかなかに難しいことである。世上、利欲のために手段を選ばぬ風潮も見られるだけに、年に数度は靖國神社の本殿で心静かにこの神鏡に正対し、「神道の心」に我が身を浸す、そんな時間を大切にして戴きたいものである」と。

神道には、正にそのような清明心が宿っているのである。

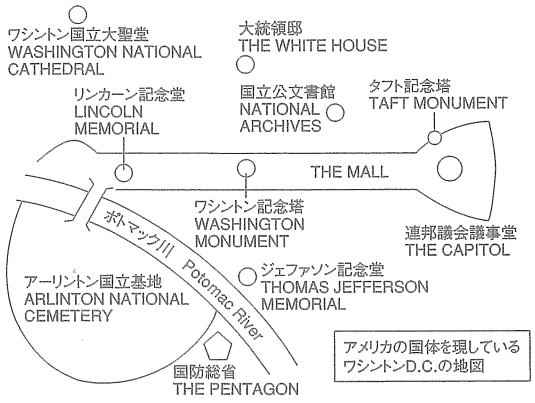
一方、アメリカ合衆国の国立アーリントン墓地は、大方御承知のとおり、ワシントンDC（コロンビア特別区）

の南西部、ポトマック川の橋を渡った左岸にある広さ約２５０万平方メートルに及ぶ広大な国立墓地である。ここには建国以来国のために殉じた戦死者のうち約23万余柱が埋葬されている。戦死者だけでなく、ケネディ大統領など国民的英雄の墓もある。墓地の南東部には、特異な五角形の建物を有し、通称ペンタゴンで有名なアメリカ国防総省が厳然と屹立して、恰も英霊達の意志を受け継ぎ、日夜国防の任に当たるとの意義を強調しているかのようである。

墓地の入口には大きな掲示板があって、「…この地は我が国で最も神聖な寺院である。参拝者は常に気品と尊敬の念をもって自らを律してもらいたい。そしてくれぐれも聖なる場所であることを忘れないように」と書かれている。墓地内の西南の高台には、真っ白な大理石の墓石があって、そこには第一次、第二次の世界大戦、朝鮮戦争及びベトナム戦争で戦死した身元不明の４人の遺体が埋葬され、墓石の裏には「神のみぞ知るアメリカ兵士の栄光ここに眠る」と刻まれている。そしてまた、墓地内の高台には５千人を収容できるという円型の野外教会堂が建っており、年３回、陸海空三軍の長や大統領列席の下に、従軍牧師が主催する盛大な慰霊祭が挙行されているとのことである。

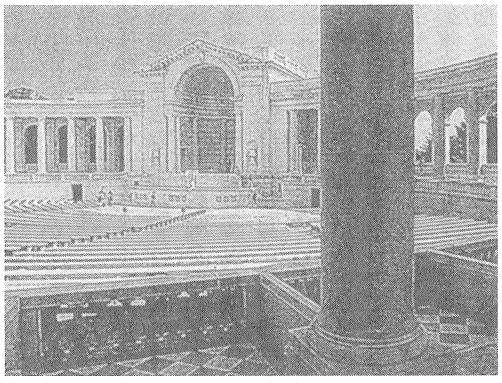


８月15日の千鳥ヶ淵戦没者墓苑六角堂前



アメリカの国体を現しているワシントンD.C.の地図

高貴な精神を持つ愛国者と今に慕われている故名越二荒之助先生（元高千穂商科大学教授、平成19年４月11日逝去、享年84歳）の遺著とも言える『史実が語る日本の魂』（モラロジー研究所発行）の中の一文「世界宗教サミットの提唱―靖國神社とアーリントン墓地から」によると、国に殉じた人々を祀るために国立の墓地を造っている国は多いが、国立墓地の場合は、国家が遺骨を引き取るから、広大な土地が必要となる。そのため墓地も分散する。アメリカの場合、第一次大戦の戦死者３万余柱をヨーロッパの８箇所に分散して国立墓地を造っており、第二次大戦の場合、戦死者93万余柱を世界各国14箇所に墓地を造成している。アーリントン墓地だけでも23万余柱の墓を靖國神社の25倍の敷地に造成しているが、それでも狭くて困っている。イギリスは第一次、第二次両大戦の戦死者が１７０万柱、墓地は世界各国１４７箇所（日本には横浜の狩場町に英軍墓地がある）に及ぶ。韓国も米・英方式であるためソウルの国立墓地が狭くなり、最近大田市に百万坪の土地を造成したとのことである。これに対して、日本の場合、遺体・遺骨は国が取り上げず遺族に返還し、その家の祖先と共に祀る。そして国としては、全ての戦死者の霊を靖國神社に合祀し、地方では多くの場合、護国神社に合祀する。そして引き取る人のいない氏名不詳の方々の御遺骨は千鳥ヶ淵墓苑に納める。この日本の方式が最も自然で国民の意識に沿っているのではないか、と先生は述べておられる。



アーリントン国立墓地の高台にある野外教会堂

更に先生は、「日本に在住している欧米人がよく口にすることがある。日本に住んでいると、シントー・イストになってしまう。キリスト教徒は日曜日には教会に行き、牧師の前で懺悔しなければならない。これが苦痛だ。

その点神道はよい。御参りして柏手を打てば、それでさっぱりする。それに神主さんはお説教をしないからよい」と。また、「日本人の家には、国の祖先を祀る神棚と、家の祖先を祀る仏壇がある。それに12月ともなればクリスマスツリーが飾られ、ジングルベルが鳴り始める。25日になればケーキを食べて『きよしこの夜』を歌う。その後1週間もたてば除夜の鐘とともに明治神宮に参拝して、その足で川崎大師、成田不動尊、浅草寺から靖國神社それに地元の氏神様というように、初詣に忙しい。世界で最も宗教に対して寛容で、いろいろの宗教と同居し調和する能力を身につけている。これが日本的個性だ」と。更に「日本人はどうして靖國論争に巻き込まれるのか。靖國神社は、世界のどこにもない日本の伝統的信仰で祀っているから、すばらしいのだ。世界各国は、伝統的信仰の原点を見失っている。そのため味気ない宗教上の論争が絶えないし、宗教論争が今も続いている。そもそも他の宗教と喧嘩する宗教は、偏狭な邪教ではないか。邪教ばやりの世界に向かって、日本人の汎神的宗教観を発信せよ」と。そして、「現在の世界は、経済サミットや政治サミットで忙しい。神社本庁あたりから世界に向けて、『宗教サミット』を呼びかけたらどうか。新・旧のキリスト教、イスラム教（シーア派・スンニー派）、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教等の代表者に集まってもらって、宗教や信仰の原点は何か、相互理解を促すべきではないか」と主張しておられる。誠に至言というべきで、これが実現できれば、人類は、世界平和に向けて大きく前進することができるであろう。

（飯田正能記）

靖國神社宮司に京極高晴氏就任

靖國神社は、6月12日、同神社の最高意思決定機関である総代会と宮司推薦委員会を開き、去る1月7日に急逝された南部利昭前宮司の後任宮司に、京極高晴（きょうごくたかはる）氏（71歳）を決定した。就任は6月15日付けである。以下は産経新聞6月13日の記事である。

「…南部氏に続き、2代続けて旧華族で神職経験のない民間企業出身者の宮司となる。

京極氏は旧但馬豊岡藩（兵庫県）の藩主だった京極家15代当主。東大法学部卒業後、日本郵船事業部長、氷川丸マリンタワー社長、関東曳船（えいせん）社長などを歴任した。第10代宮司就任に当たって京極氏は「御創立140年にあたるこの年に、宮司の大役を仰せつかることとなり、身の引き締まる思いでいっぱいです」とのコメントを出した。」

◇　◇　◇

編注・なお、毎日新聞は、6月12日朝、次のような記事をメールで配信した。参考までに掲載するが、マスコミの動向には注意を要する。

「…後任の宮司に京極高晴氏（71）を充てる人事案を提示し、了承される見込みとなった。同神社の宮司は規定で75歳が定年のため、暫定人事の色合いが強いと見られる。

京極氏は旧但馬豊岡藩（兵庫県）の藩主だった京極家の15代当主。日本郵船事業部長、氷川丸マリンタワー社長、関東曳船社長などを歴任。父の故高光氏は貴族院議員で俳人だった。旧盛岡藩主だった南部氏に続き、2代続けて旧華族で神職経験のない民間企業出身者が宮司となる。

南部氏の死後半年間、後任人選は難航し、一時は旧皇族でA級戦犯合祀に慎重だったとされる筑波藤麿元宮司（在職1946～78年）の親族が候補に浮上した。だが折り合いがつかず、旧華族の中から選ばれた。

◇**解説**　宮司に筑波氏親族一時検討…柔軟路線転換も示唆

靖國神社の新宮司は、2代続けて旧華族出身者となることが内定した。旧華族出身者らでつくる社団法人霞会館が人選した皇室と近い名誉職的な宮司を神職の幹部職員が支える体制で、従来の保守路線を踏襲するとみられる。

実現こそしなかったが、筑波藤麿元宮司の親族を宮司とする案を一時検討したことは、同神社が柔軟路線に転じたことを示唆するものとも受け取れる。筑波氏は65年、全世界の戦没者と国内未合祀者を祭る小さな「鎮霊社」を設立、靖國神社は、国家や天皇のために戦死した者のみを祭る「顕彰」がその趣旨だが、それとは異なる「国際平和主義」の精神を持ち、皇室の意向に配慮した。だが筑波氏の死後、松平永芳宮司は78年の就任直後にA級戦犯を合祀した。

安倍、福田、麻生政権で首相の参拝はない。神社関係者は「今は静かだから、合祀、分祀で波風立てたくないのだろう」と京極氏に落ち着いた背景を

推測する。一方でA級戦犯合祀以来、神社側が求めながらも途絶えている天皇参拝が実現するめどはない。分祀を検討する日本遺族会幹部は「筑波元宮司が合祀を預かった状態に戻せばいい。誰が宮司になろうと議論は必要」と意欲を見せる。」

「遺骨収集・軍人墓地の管理は国の責任」と厚生労働大臣明言

平成21年4月20日（月）午後、参議院決算委員会において、衛藤晟一議員（自民党）の質問に対して、舛添厚生労働大臣は、国の責任として遺骨を収集する、民間団体の参画に支援もやりたいと思っている。また、軍人墓地の管理については、関係省庁と連携を取りながら、国の責任としてきちんと管理をしていきたいと答弁した。

以下は、当日の参議院決算委員会における衛藤晟一議員の質問に対する政府答弁の要旨である。

1　海外の遺骨収集について

①　現状のままだと、海外に残っている戦没者の御遺骨すべてを収集するためには千年掛かることを、国会で明確にした。

先の大戦において、海外で亡くなった戦没者は約240万人で、現在までに約125万柱の御遺骨が日本に帰ってきました。差し引き残り約115万柱のうち、約30万柱は艦船又は飛行機ごと海中に沈んでいる海没遺骨であり、約26万柱は中国や北朝鮮など相手国の事情によって遺骨収集が困難なことから、当面の遺骨収集の対象となる遺骨の最大数は、約59万柱である。ところが、遺骨収集の年度別実績表を見ると、近年、平成17年、18年はそれぞれ年6百柱ほど、平成20年は2千柱ほどである。年6百柱だと約1千年、年2千柱でも約3百年掛かる計算になる。

②　国のために亡くなった戦没者の遺骨収集は、あくまで「国の責任」であることを、舛添厚生労働大臣が再確認した。

③　これまで海外での遺骨収集は、政府派遣団しか認めてこなかったが、アルピニストの野口健さんのNPO・空援隊の活動等の実績を踏まえ、今年度から遺骨収集数を増加させるため、民間団体との連携を重視するとともに、現地で情報収集をする民間団体には、国費支援を行うよう、方針転換することを担当者が明言した。

④　しかし、遺骨収集に関係する政府予算は、今年度3億2千百万円で、所管する援護担当部局外事室の職員は29名である。これに対し、アメリカは国防総省の下に「戦争捕虜・行方不明者捜索統合司令部」という専門の司令部があり、その予算も日本の15倍の年間約50億円で、スタッフの数もやはり15倍の400人以上の専門チームを抱えていることを指摘。衛藤議員は、より一層の予算の増額とスタッフの充実、特に現地事務所の開設や専門の遺骨鑑定機関の設置の必要性を指摘した。

2　国内の軍人墓地の管理について

①　昭和37年から38年にかけて当時の厚生省が行った調査によれば、全国各地に陸軍墓地が75箇所、海軍墓地が7箇所、計82箇所の軍人墓地があることが分かった。

②　これらの軍人墓地は、戦後GHQの政策によって地方自治体の管理に任されてしまっている。

軍人墓地は明治維新以降、順次全国各地に建設され、明治維新から日清、日露、満洲事変、支那事変、大東亜戦争で亡くなった陸海軍の軍人・軍属の御遺骨が納められている。陸軍関係は陸軍墓地が、海軍関係は海軍墓地があり、戦前までは陸軍省、海軍省がそれぞれ法令に基づいて管理していた。ところが、先の大戦に負けて昭和20年12月に陸軍省、海軍省は解体され、軍人墓地を管理していた規則も、GHQによって廃止されてしまった。やむなく軍人墓地の所有権は、当時の大蔵省に移され、大蔵省は、昭和21年6月に事務次官通知を出して、墓地及び公園として使用することを条件に、地方自治体に無償貸付又は譲与した。

③　財務省は現在、これらの軍人墓地の管理を地方自治体に丸投げし、その実態すべてを把握できていないことが明らかになった。特に所有者たる財務省でも、どうなっているのか分からない軍人墓地が15箇所もあることが判明した。

「全国82箇所の軍人墓地について調査したところ、譲与等の処分済財産29箇所、国有財産として無償貸付をしている財産32箇所、その他国有財産として管理している財産6箇所、不明のもの15箇所である。」（財務省答弁）

④　福岡市に所在する谷陸軍墓地については、地震で石碑の土台がずれたにもかかわらず、福岡市は、地元住民の要望を無視して修理しようとしなかった。このため、地元住民が寄付を募り、

自主的に修理した。この管理状況について、財務省は、「国有財産法第22条の規定により、福岡市に無償貸付をしており、その維持管理は、福岡市がしている」と明言した。

⑤　陸軍墓地及び隣接の公園の無償貸付に際しては、財務省と福岡市との間で5年ごとに「国有財産無償貸付契約書」を取り交わしており、その第11条には、「乙（福岡市）は、善良な管理者としての注意をもって貸付物件の維持保全に努めなければならない。（中略）3　第一項の規定により支出する費用は、すべて乙（福岡市）の負担とし、甲に対しその償還等の請求をすることはできない」と規定されている。この規定に基づいて福岡市は、「貸し付けた財産に係る善良な管理者としての注意をもって貸付物件の維持保全に努めなければならない」と、財務省は明言した。

⑥　衛藤議員は、この「善管注意義務」に基づいて、宮城県や愛媛県は、軍人墓地の日常的な維持管理及び工作物の修復費用も県が負担していることを指摘。これに対して財務省は、「地方公共団体において、公園や墓地という貸付の利用目的に沿った施設の維持管理を行っていただいていると理解している」と発言。

これに対して、衛藤議員は、「国有財産を無償で公園や墓地として貸付しているわけですから、軍人墓地の日常的な管理や工作物の修繕は、管理者たる地方自治体の責任であることを、5年ごとに「国有財産無償貸付契約書」を取り交わす際、地方自治体に徹底していただきたい」と要望した。

⑦　さらに、福岡市と福岡財務支局との間に結ばれた「契約書」第13条には「甲（財務省）は、…用途指定の履行状況を確認するため、甲（財務省）が必要と認めるときは実地調査又は実地監査を行うことができる」とあることから、軍人墓地の管理をめぐって問題が起こった場合、この条文を援用して実地調査をすべきだと質問したのに対し、財務省は、「無償貸付中の財産については、使用目的や使用上の制限等用途指定の履行状況を確認する必要があると認めるときには、実地調査等を行うこととしている」と答弁し、必要があれば、実地調査を行うことを明言した。

◇　◇　◇

以上の事に関し、マスコミはほとんど報道していないが、『産經新聞』の平成21年5月11日の朝刊（文化欄）に、次のとおり掲載された。

荒廃する軍人墓地　管理責任、国が言及

全国各地に点在する軍人墓地の管理を今後どうするかが問題化している。旧陸海軍人の戦没者を慰霊する墓地は太平洋戦争後、国が地方自治体に管理を〝丸投げ〟したことが原因で、一部で荒廃が進む事態となっていた。参院決算委員会で管理責任について問われた舛添要一厚労相は「関係省庁と連携を取りながら国の責任としてきちんと管理していきたい」と答弁。国もやっと目を向けることになったが…。

明治維新以降、戦争で亡くなった陸海軍人の遺骨を収めた軍人墓地は、明治期から戦前までは陸軍省、海軍省が管理していた。しかし敗戦で両省は解体、墓地の管理規則もGHQ（連合国総司令部）によって廃止された。管理責任があいまいになったのは、国有財産として墓地を移管された大蔵省が昭和21年6月に事務次官通知を出して、墓地及び公園として使用することを条件に、地方自治体に無償で貸与ないし譲与したためだ。

昭和37～38年に厚生省が行った調査では、全国に陸軍墓地75カ所、海軍墓地7カ所が確認されていた。平成11年に、旧陸軍将校らの親睦組織「偕行社」が65カ所の陸軍墓地を調査したところ、多くは自治体に予算がないとの理由で、民間のボランティアによって日常の管理作業が行われていた。中には山口市の山崎陸軍埋葬地や高知市の陸軍墓地のようにまったく管理も慰霊も行われていないところもあった。

約4500柱を収める広島市の広島比治山陸軍墓地は、広島市が掃除などの日常的な管理に人員を派遣しているが、十分な維持管理ができないため、市民が自主的に清掃奉仕を行っている。ただ、奉仕活動をする人々の高齢化が進んでいて、有志の市民は「このままでは墓地の荒廃は避けられそうにない」と訴える。

約9000柱が収められている福岡市の谷陸軍墓地では、平成17年3月に起きた福岡県西方沖地震で、石碑がずれたり、骨壺が落ちて遺骨が散乱する被害が出た。民間の有志で石碑修復委員会を結成して修復費1100万円を集めて現状を回復。福岡市は修復には協力せず、19年10月に修復完了を報告する慰霊祭を開催した際には、隣接する公園を使用したとして、公園使用・占有料の4万4610円を請求した。

福岡市は、清掃などの日常的な管理は「利用者にお願いしている」。石碑や骨壺は「市が管理すべきものか判断

できない」としている。また、公園使用・占有料については「利用者から減免申請がなかったため、規定通り請求した」と説明する。

戦没者慰霊顕彰事業の現状と問題点

（財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局

大東亜戦争戦没者の慰霊のため、毎年8月15日の天皇、皇后両陛下をお迎えしての慰霊祭の催行、厚生労働省職員が先頭に立っての毎年10数次に及ぶ海外遺骨収集の実施など、厚生労働省担当部局の戦没者慰霊への真剣な取組みには敬意を表するが、国・政府全体としてみた場合、戦没者慰霊顕彰への関心が極めて希薄、戦没者慰霊顕彰事業に専従する行政組織の皆無、戦没者慰霊への国としての取組み姿勢が全く見えないことなど、寒心に堪えない。

以下、問題点と思われる幾つかの項目について現状を概観する。

1　厚生労働省の所掌事務

厚生労働省設置法に定められた所掌業務に「引き揚げ援護又は戦争傷病者、戦没者遺族、未帰還者留守家族若しくはこれらに類する者に対する援護又は旧陸海軍の残務の整理を目的とする事業」があり、本条項のみが、同省が慰霊祭、遺骨収集、慰霊巡拝等の戦没者慰霊事務を掌る根拠になっているものと推察される。要するに戦没者の慰霊顕彰は、我が国においては、遺族援護及び旧陸海軍の残務整理の範疇でしか捉えられていない、と考えざるを得ない。

2　新公益法人体制移行における戦没者慰霊事業の位置付け

新公益法人体系における公益事業の定義が認定法別表第1～第22号に列挙されているが、国の重要な事業であるべき「戦没者慰霊顕彰事業」については全く言及されていない。しかも、公開説明会における認定委員会事務局の説明で「戦没者慰霊事業は、第3号『障害者若しくは生活困窮者又は事故、災害若しくは犯罪による被害者の支援を目的とする事業』の範疇で考える」との見解が示された。

これを糺す趣旨で当協議会他が行った内閣官房長官宛要望書提出がきっかけとなり、「戦没者慰霊事業は、第18号『国政の健全な運営の確保に資することを目的とする事業』の範疇で捉えることが至当」との厚生労働省の見解が提示されたが、このような議論が政府部内で罷り通る状況が示すとおり、戦没者慰霊顕彰の意義、重要性が、国政の中枢においてすら十分理解されていないのが実状と考える。まして、国民一般においておやである。

3　海外遺骨収集の状況

先の大戦において、アジア全地域に及ぶ海外戦場に赴かれ、戦禍に倒れられた戦没者は、240万人（硫黄島・沖縄の戦没者、シベリアの抑留死者を含む）に及ぶ。しかしながら、そのうち遺骨として御帰還いただいた方々は未だ125万柱に過ぎないと聞く。

厚生労働省が中心となり、日本遺族会、JYMA、諸戦友団体の要員を募っての遺骨調査・収集のための海外派遣は、毎年10数次に及ぶが、未だ道遠しの感がある。加えて、戦後60余年を経て、当事者の記憶も薄らぎ、現地の環境も変化し、収集作業は益々困難となる傾向にある。遺骨情報の体系化、収集派遣要員の拡大など、引き続き国を挙げての取組みが望まれる。

4　旧陸海軍墓地等の現状

旧陸軍が各衛戍地ごとに管理していた陸軍墓地及び海軍が各鎮守府ごとに管理していた海軍墓地（昭和37年の調査によると合わせて82カ所）は、昭和21年に大蔵省から県市町村に無償貸付され、その維持管理は地元の市町村、民間（戦友会、遺族会等）に委ねられた。しかしながら、地元・民間の善意のみに依存する維持管理は、その程度にそれぞれ格差があり、中には土地の切売りが検討されている箇所もあるやに聞く。一方、平成17年の地震で大損壊の被害を被った福岡陸軍墓地の惨状を見た地元の郷友会、偕行会などの民間有志が立ち上がり、2年の歳月を経て民間募金のみにより見事に修復を果たした美談もある。しかし、これも国のツケを民間有志が尻拭いをした訳で、美談というには、余りにも痛ましい事例である。

明治以来、国のために殉ぜられた戦没者を祀る陸海軍墓地を管理・慰霊す

4月20日の参院決算委員会で衛藤晟一議員（自民）の質問に応じて「国の責任」に言及した舛添厚労相。答弁を聞いた偕行社の菊地勝夫事務局長は「戦没者の慰霊はどこでも国を挙げて取り組んでいます。尊い命のおかげで今日があるからです。軍人墓地の維持管理、慰霊は基本的には国がすべきです」と話している。

（桑原聡）

るのは、元来、国の責任ではないのか。この陸海軍墓地を維持管理する国の機関・組織が全く存在しない現状を憂える。

併せて、全国市町村に2万カ所以上（国立歴史民族博物館・平成15年調査資料による）ある忠魂碑・忠霊塔についても同様の状況にあることを指摘したい。その多くは市町村や民間（在郷軍人会等）によって建立されたものであるが、現在も市町村等が管理し、清掃等は隊友会、偕行会等会員の善意に委ねられている所が殆どである。右の調査資料によれば、これらの忠魂碑等には戦没者の遺骨を収納している施設も多い。

5　海外所在民間建立慰霊碑の現状

国は、大東亜戦争の主要な戦域ごと、計15カ所（他に小規模施設6カ所）に国立の戦没者慰霊碑を建設している。しかし、海外各地にはその他、各戦友会、部隊会等によって建立された慰霊碑（いわゆる民間建立慰霊碑）が多数存在する。厚生労働省が偕行社その他の諸団体に委託し数年かけて調査した結果によれば、その数680カ所を超える。

建立団体の多くは、毎年その地を訪れ、戦友の霊を弔うと共に、地元関係者と交流を密にして維持管理に留意して来られたが、近年は会員の高齢化に伴い、訪れる回数も減り、荒廃化の悩みを訴えられる団体も多い。中には、既に訪れる人もなく、朽ち果てているものもある由である。

これらに対し、「民で造ったものは民で処置」が国の基本的態度と聞くが、遠く僻遠の地で、国のために散って逝かれた戦没者の霊を慰め、共に戦った戦友の思いを大切にするためにも、これらの民間建立慰霊碑の護持に、国としての格別の施策を期待するものである。

6　戦没者慰霊顕彰事業の原点

先の大戦において、240万余の方々が国を思い、民族の安寧を願って、雄々しく戦場に散って逝かれた。この尊い犠牲の上に、現在の日本の平和と安定の基礎があり、発展と繁栄があることを、国民はもっと知るべきである。世界の他の国々の例を引くまでもなく、戦没者の慰霊と顕彰、とりわけ国民一般の意識啓蒙は、民間に任せることなく、国が責任をもって果たすべき事業と考える。

そういった国家的観点から見て、戦没者慰霊の所轄官庁が「厚生労働省」であること、戦没者慰霊事業が「戦没者遺族の援護」の範疇に限られていること、そのこと自体が、我が国の根本的問題ではないだろうか。

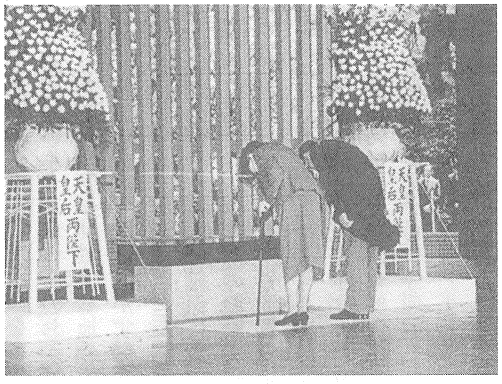
平成21年度 千鳥ケ淵戦没者墓苑拝礼式

千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会

平成21年度厚生労働省主催の拝礼式が、5月25日（月）三笠宮崇仁親王、同妃百合子両殿下の御臨席を仰ぎ、新緑滴る千鳥ケ淵戦没者墓苑において、厳粛に執り行われた。

掃き清められた墓前には、天皇皇后両陛下御下賜の大花籠が供えられ、約600名の参列者がお待ちするなか、定刻12時30分、両殿下が御臨場になられて拝礼式は開始された。

皇宮警察音楽隊の演奏に合わせ、参列者全員が国歌「君が代」を斉唱し、次いで、厚生労働大臣（代理渡辺孝男副大臣）の式辞奉読の後、同省社会・援護局長（代理及川　桂大臣官房審議官）から手渡された御遺骨を奉持して納骨の儀を執り行った。今回、納骨堂に納められた御遺骨は、硫黄島、フィリピン、インドネシア、東部ニューギニア、ビスマーク・ソロモン諸島等において収集された1406柱で、これにより千鳥ケ淵戦没者墓苑には合計35



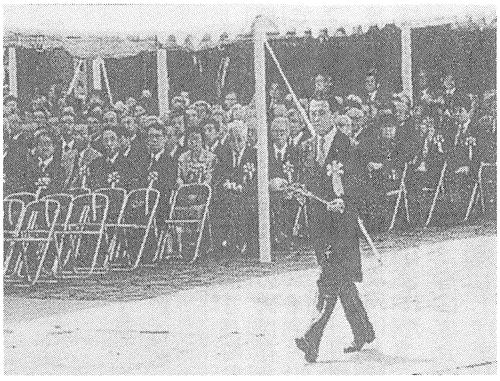
礼拝される三笠宮同妃両殿下

御臨場される三笠宮同妃両殿下

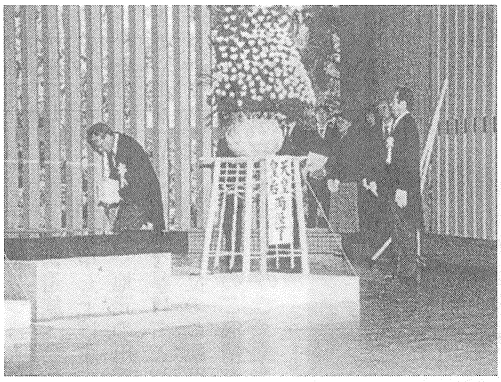
万4332柱の御遺骨が納められたことになる。

納骨の儀終了の後、参列者一同が起立する中、三笠宮同妃両殿下が墓前にお進みになって深々と御拝礼、戦没者の御冥福をお祈りになられた。参列者一同も両殿下の御拝礼に合わせて拝礼を行い、その後、両殿下は、一同がお見送りする中を、遺族に御会釈を賜りながら御退場になられた。

次いで、麻生太郎内閣総理大臣が献花、拝礼され、続いて厚生労働副大臣、橋本聖子外務副大臣、関係国のインドネシア共和国、モンゴル国、パラオ共和国、フィリピン共和国、ロシア連邦の各駐日大使、ソロモン諸島名誉領事、吉野正芳環境副大臣、武田良太防衛大臣政務官、田村憲久衆議院・辻泰弘参議院各厚生労働委員長、各政党代表として、保利耕輔（自民）、渡部恒三（民主）、太田昭宏（公明）、阿部知子（社民）、亀井久興（国民新）、渡辺秀央（改革クラブ）、田中康夫（新党日本）の各議員、麻生　渡全国知事会会長、尾辻秀久日本遺族会副会長、遺族代表の献花が行われ、最後に、宮下創平千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会会長が献花を行って、13時25分、式典は滞りなく終了した。その後、一般参列者やこの日に合わせて来苑した遺族・慰霊団体等の参拝が相次いだ。



献花に向かう麻生内閣総理大臣



厚生労働大臣（代理渡辺副大臣）による納骨の儀

拝礼式式辞

厚生労働大臣　舛添　要一
（代理副大臣　渡辺　孝男）

本日ここに、三笠宮同妃両殿下の御臨席の下、戦没者御遺族及び来賓各位の御参列を得て、千鳥ケ淵戦没者墓苑拝礼式を挙行するに当たり、一言ごあいさつを申し上げます。

先の大戦におきましては、多くの同胞が、祖国の安寧を願いながら、苛烈な戦闘に倒れ、また、戦後、遠い異国の地でお亡くなりになりました。

これらの海外戦没者の御遺骨を祖国にお迎えするため、政府におきましては、昭和二十七年度以来、戦没者御遺族、戦友の方々をはじめとして多くの関係者の皆様とともに全力を挙げて御遺骨を収集してまいりました。特に昨年度は、NPO法人を含め多くの方々のご協力を得て、二千三十八柱を収集したところであります。

・しかしながら、戦後六十年以上が経過した今もなお、多くの戦没者の方々が海外に眠っておられます。こうした方々に思いを致すとき、一日も早く御遺骨を祖国にお迎えできるよう、関係者の皆様と一層の連携協力のもとに、国として今後とも力を尽くしてまいりたいと決意を新たにするところであります。

ここ千鳥ケ淵戦没者墓苑に、本年は、硫黄島、フィリピン、インドネシア、東部ニューギニア、ビスマーク・ソロモン諸島等において収集いたしました千四百六柱を新たにお納めいたします。これにより千鳥ケ淵戦没者墓苑に納められる御遺骨は三十五万四千三百三十二柱を数えることとなります。

この式典に当たり、改めて今日の我が国の平和と繁栄の礎となられました戦没者の方々に深く思いを致し、謹んで哀悼の誠を捧げますとともに、先の大戦から学びとった多くの教訓を次の世代に継承し、恒久の平和を確立すべく力を尽くしてまいりますことをお誓いいたします。

最後になりますが、千鳥ケ淵戦没者墓苑にて眠られる戦没者の方々の安らかな眠りと、戦没者御遺族の皆様方の御平安を切に祈念いたしまして、式辞といたします。

第43回特攻殉国者慰霊祭

特攻殉国の碑保存会
（長崎県川棚町新谷郷）

当協議会の参加団体である長崎県川棚町新谷郷（しんがえごう）の「特攻殉国の碑保存会」では、去る5月10日（日）14時から、「特攻殉国の碑」前において、川棚町後援の下に、「第43回特攻殉国者慰霊祭」を厳粛、盛大に斎行された。

右の慰霊祭に当たり、当協議会から供花料及び慰霊電文を差し上げましたところ、同保存会西村金造事務局長より、次のような、ご鄭重なるお礼状とご報告を頂戴いたしましたので、ご披露いたします

「拝啓　新緑の好季節の折柄、尊台様にはますますご健勝の段、慶賀至極に存じ上げます。平素より当保存会に対し並々ならぬご協力・ご援助を賜り、有り難く厚くお礼申し上げます。

さて、5月10日の第43回特攻殉国者慰霊祭には、多額のご芳志・お供物を下され、また、ご丁重なお便りと弔慰電報を頂戴し、誠に有り難く、ご懇情の程、厚く御礼申し上げます。勿論、貴信は謹んで霊前に奉呈させて頂きました。

お陰様で慰霊祭が荘厳且つ盛大に挙行出来ました次第で、御遺族・会員と共に心から感謝、御礼申し上げます。

今年は天候に恵まれ、地元の川棚町と新谷郷をはじめ組織を挙げてご加勢下さいました。ご来賓各位のご臨席も多く、人品の勝れた皆様のご温情が、慰霊祭会場に漲りましたので、御遺族の皆様方も等しく感激され、悲しみを新たにされておられましたし、在天の英霊も、さぞ喜んで下さったことと思います。

今年も御遺族様のご出席が多く、戦死者の甥や孫に当たる若人も目立ちました次第で、御遺族様の戦死者に対する追慕の情の深さをしみじみと偲んだ次第でございました。

このような次第で、御来賓の皆様方の御出席と海陸自衛隊の御支援並びに地元の皆様の御協力は、どんなにか御遺族の皆様方を力強く励ますことが出来、また、英霊をお慰めすることが出来たのではないかと思います。本当に有り難うございました。

今後とも何とぞ一層のご指導・ご援助をお願い申し上げまして、簡単で恐縮ですが、御礼まで申し上げます。

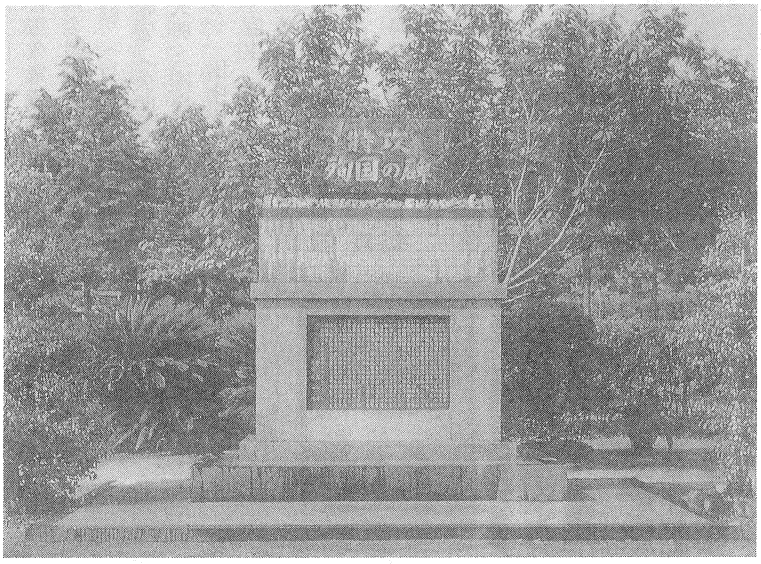
敬　具

平成21年5月17日

新谷郷総代　田添　兼利

特攻殉国の碑保存会

事務局長　西村　金造」



碑　文

昭和19年、日々悪化する太平洋戦争の戦局を挽回するため日本海軍は臨時魚雷艇訓練所を横須賀からこの地長崎県川棚町小串郷に移し魚雷艇隊の訓練を行なった。

魚雷艇は魚雷攻撃を主とする高速艇でベリリュー島の攻撃、硫黄島最後の撤収作戦など太平洋、印度洋に活躍した。更にこの訓練所は急迫した戦局に処して全国から自ら志願して集まった数万の若人を訓練して震洋特別攻撃隊、伏竜特別攻撃隊を編成し、また回天、咬竜などの特攻隊員の練成を行なった。

震洋特別攻撃隊は爆薬を装着して敵艦に体当りする木造の小型高速艇で7千隻が西太平洋全域に配備され、比国コレヒドール島沖で米国艦船四隻を撃破したほか沖縄でも最も困難な状況のもとに敵の厳重なる警戒を突破して特攻攻撃を敢行した。伏竜特別攻撃隊は単身潜水し水中から攻撃する特攻隊でこの地で訓練に励んだ。

今日焼土から蘇生した日本の復興と平和の姿を見るとき、これひとえに卿等殉国の英霊の加護によるものと我等は景仰する。

ここに戦跡地コレヒドールと沖縄の石を併せて、ゆかりのこの地に特攻殉国の碑を建立し遠く南海の果てに若き生命を惜しみなく捧げられた卿等の崇高なる遺業をとこしえに顕彰する。

昭和42年5月27日

有　志　一　同
元　隊　員　一　同

遺烈

表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」（英文表記「Japan Youth Memorial Association」略称「JYMA」（旧日本青年遺骨収集団）の機関紙（月刊）の題字であるが、その第108号（平成21年3月1日発行）によれば、同法人の平成20年度における遺骨収集事業は、次の一覧表のとおり実施され、7地域に十次にわたって延べ53名の青年・学生を送り出し、1063柱の御遺骨を祖国に奉還することができた（沖縄については現地に納骨）。

収集された御遺骨は、千鳥ケ淵戦没者墓苑において行われる御遺骨引渡式において、厚生労働省に引き渡され、同省での身元調査が行われて御遺族が判明すれば、御遺族の元にお渡しし、氏名不明の御遺骨は、毎年5月に行われる拝礼式において、千鳥ケ淵戦没者墓苑に納骨される。

今年は、去る5月25日（月）千鳥ケ淵戦没者墓苑において、別掲のとおり、厚生労働省主催の平成21年度千鳥ケ淵戦没者墓苑拝礼式が挙行された。

なお、毎号機関紙に掲載される遺骨収集派遣隊員の報告書には感動させられるが、ご了承を得て、第108号及び第110号からその一部を転載させていただいた。

フィリピン、沖縄、第四次硫黄島派遣隊帰還!!
平成二十年度遺骨収集完了

次派遣	派遣地域	派遣隊員	収集柱数	日数
247	硫黄島 第1次 6月29日～7月14日	景山　智久（国士舘大学3年） 矢田　雅紀（中央大学3年） 鈴木　由充（社会人）	9柱	17
248	サバイカル 8月21日～9月9日	佐々木優子（社会人） 野崎　史弥（拓殖大学2年） 山口　美朝（拓殖大学1年）	217柱	19
249	モンゴル 8月25日～9月9日	谷崎　龍三（明治大学4年）	24柱	15
250	硫黄島 第2次 9月17日～10月2日	半田　博昭（社会人） 岡本　卓也（社会人）	2柱	15
251	ビスマークソロモン 9月22日～10月9日	渡部　覚子（拓殖大学4年） 中村　さよ（社会人） 有田　敦（東洋大学1年）	146柱	17
252	東部ニューギニア 11月10日～11月28日	磯部　大（社会人） 安齋　慶（国士舘大学4年） 高橋　雅樹（国士舘大学4年） 高木　悠太（神戸市外国語大学4年）	114柱	19
253	硫黄島 第3次 11月26日～12月11日	黒澤　崇（社会人） 大田　寛樹（一橋大学3年）	1柱	13
254	フィリピン 1月20日～2月3日	安齋　慶（国士舘大学4年） 常泉　雅宣（社会人） 小林亮太郎（社会人）	517柱	14
255	沖縄 2月2日～2月10日	学　生23名 社会人5名	19柱	8
256	硫黄島 第4次 2月11日～2月27日	高橋　雅樹（国士舘大学4年） 新家　智成（社会人） 山口　美朝（拓殖大学1年） 染田　英利（社会人）	14柱	16
計	10次派遣	延べ53人（学年は参加時）	1,063柱	153

【第二五四次フィリピン派遣報告】

フィリピン派遣に参加して

第二五四次フィリピン派遣隊隊員
靖國神社神職　常泉　雅宣

厚生労働省社会・援護局による平成20年度フィリピン遺骨収集が、1月20日（火）から2月3日（火）までの15日間、フィリピン共和国において実施された。

私は、その関係参加団体の一つであるJYMAからの要請により参加する機会を得、第一班の団員に編成されて参加した。一行は1月21日に成田を発ち、フィリピン共和国内の各関係機関への表敬訪問等を済ませ、翌日分班した。第一班は空路にてセブ島へ渡り、コンポステラ町に投宿し、マスバテ島で収集され空援隊がセブ島まで搬送した御遺骨を始め、セブ島サンレミジオ・ソゴド・カルメン各町での受領並びに収集、その後宿舎をセブ市に移してセ

ブ市・バリリ町、そしてボホール島へ海路にて移動し、ギンドゥルマン町等でそれぞれ御遺骨の受領等に1月27日まで従事した。その後ルソン島へ戻り、世界遺産でもあるライステラスのあるイフガオ州へ陸路にて移動。第二班と合流し、焼骨式並びに追悼式に参列した。

〈収集作業について〉

私は初めての遺骨収集団への参加であったため、全てが未知の経験であり、日々緊張感一杯であった。また、今回の収集団は、従来のような現地での作業中心の収集ではなく、現地住民等が収集した遺骨を「特定非営利活動法人空援隊」を介して受領する形態が主で、受領後にフィリピン国立博物館の鑑定人と共に行う鑑定作業が中心となっており、予め想像していた作業とは全く異なっていた。現場での実際の収骨作業は、セブ島サンレミジオ町での1回のみであったが、奥行き10メートル程の横穴洞窟に潜っての作業であり、このような山中の洞窟に旧日本軍の方々が、遠く祖国に家族や大切な人を残し、志半ばにして斃れられたことを考えると、とても遣る瀬無い気持ちになった。更に、収骨作業では、熊手やスコップを使用して慎重に粘土質の地層を掘り進んだが、力加減が判らず遺骨を傷付けてしまうのではないか、と恐る恐る行っていた。そして、発見された遺骨は靖國神社・護國神社の御祭神の生前の御身体そのものであると思うと言葉では言い表せない想いがした。

日比両国民共同で英霊を迎える

また、受領及び鑑定のみの作業においても、遺骨の損傷状態等から南方特有の気候風土のみならず、既に終戦から60年以上もの年月が経っていることを痛感した。事前に人体の骨格について学習して行ったが、現場では各遺骨の部分毎しか見付からないケースが多く、どの部分の遺骨なのか見分けるにも苦労するような状態で、何度も収集団を経験されている他の団員との力の差を感じ、非常に歯痒かった。更に日本遺族会から参加された遺族の方が、泣きながら作業している姿に胸を打たれた。

最終的には、第一班・第二班合わせて517柱もの御遺骨を今回の収集団ではお迎えすることが出来たが、フィリピン共和国での戦没者が概数が51万8千人、その内御遺骨送還数が13万4千柱足らずであるため、ほとんどが未送還である。そして、遺骨の損傷状態や現地の事情等に鑑みると、一刻も早い収集と送還を行う必要性を実感した。

〈焼骨式並びに追悼式について〉

1月30日、イフガオ州キャンガンの広場にて、薪を組んだ8基の櫓上に遺骨を安置し、一斉に517柱を焼骨。続いて追悼式を挙行。「特定非営利活動法人空援隊」の支援者でもあるイフガオ州知事やフィリピン共和国下院議員の方も参列、収集団団長を始め構成団体の代表からも追悼の辞が述べられた。

焼骨後、骨上げの際に遺族の方々は「戦争は絶対にやっちゃいけないのです」と言いながら、最後の一片までという思いで拾い上げておられた。また、偶然かも知れないが、焼骨中に数本の光が雲間から差し、煙が日本の方角（北東）に流れるなどの現象もあり、60年以上に亘り異国に置き去りにされた戦没者達のお気持ちはどんなであったろうかと考えると、胸を締め付けられるような想いであった。

〈帰国・遺骨引渡式について〉

2月2日、日本に帰国。僅か2週間とはいえ、平和な日本で生まれ育った者としては毎日が緊張の連続で、この安堵感は体験しなければ理解し難い。成田空港からの送迎バス内に白布に覆われた遺骨箱が各団員の座席に置かれ、皆終始無言のまま東京へ向かった。仮安置する九段会館に到着すると、遺族会の職員の方々が出迎えに整列されていた。

翌日の出発の際にも見送りに整列されていた。戦没者の方々は、国の為に戦い、身罷られたのであるから、本来ならば国を挙げて…で然るべきなのにという思いで一杯であった。

2月3日、千鳥ケ淵戦没者墓苑にて遺骨引渡式及び解団式が挙行された。白い布に包まれた遺骨箱、この無言の帰還に戦時中はもっと辛い想いで遺族の方々は迎えられていたのだろうと思うと、式典を待つバスの中で涙が溢れ、こっそりと拭った。式典には、東京都並びに神奈川県の遺族会の方々も参列

されており、献花の際団員らに「ありがとうございました」と泣きながら挨拶される姿に目頭が熱くなった。

〈最後に〉

今回、フィリピンから帰国して日本の素晴らしさを感じた。「外に出て非日常的な体験をする事によって初めて理解する」という経験が出来た。また、普段意識することのない平和や生命が如何に尊いものかを考えることが出来た。

そして、フィリピン滞在中、どのようにしたらこの国の貧富の格差や多発する犯罪等を正していけるのかを考えた時、やはり永い年月と国民一人一人の自覚と努力が必要であると思い、自分が生まれた日本国の繁栄と平和、清潔さ、大きな格差の無い社会、どれを考えても2千年以上に亘る大和民族の祖先達が営々と築き上げた弛まぬ努力の結果が、今日の日本を創り上げたことを改めて感謝すると共に、神道や仏教といった基盤が、大和民族の精神の根底にあった事が鍵であったのではないかと感じた。そして、英霊達が命を賭して守って下さったからこそ日本国が今日も存在する事を、殊更感謝せずにはいられなかった。以上で報告を終わります。

【自主派遣第二五五次沖縄派遣報告】

遺骨収集を行って

第二五五次沖縄派遣隊隊員
拓殖大学二年　上村　珠緒

大学へ入学する以前に高齢者施設で働いていた私は、戦争を体験された方々から話を聞く機会があった。ある時、90歳を超える男性利用者に戦争体験を尋ねた途端、思い出すのがつらいと涙で言葉が詰まり、それ以上話を続けることができなくなってしまった方がいた。

何十年か経った今でも思い出すのがつらいほどの戦争とは何なのだろう、学校で習ってきた戦争とは何かが違うような気がした。

大学に入り、戦争について学ぶ機会が増え、それは同時に平和について考える機会にもなった。世界中の人が平和を願い、戦争はよくないことだと皆が知っているのに争いが絶えないという現実。なぜだろうと考えた時、私自身がなぜ戦争を起こしてはいけないのか、人を説得させる自分の言葉を持っていないことに気付いた。

これでは次の世代に平和を引き継ぐことなどできないし、平和を願うことも無責任のような気がしていた。このような思いから、今回遺骨収集に参加した。

今振り返ってみると、沖縄での日々は戦争と初めて真剣に向き合った時間だったように思う。

作業初日から御遺骨をお迎えすることができたのだが、最初は目の前の御遺骨と、それが土の中にあった理由が結び付かなかった。しかし、作業を重ね、御遺骨をお迎えする度に戦争が真実味を帯びて迫ってきた。一緒に出てきた遺品にその方の命の跡を感じ、銃弾に戦争のむごさを感じた。

収集活動も終盤になってくると、それまでと作業中の気持ちも変化した。

荒崎海岸での作業中、遠くから御遺骨発見との声が続けざまに何度か聞こえた。御遺骨を見付けたということは、そこで亡くなった方がいたという悲しい証明。急に涙が出た。

それまでは一柱でも多くの御遺骨をこの手でお迎えしたいと思っていたし、お迎えした時はとても嬉しかった。しかし、悲しい事実などこれ以上なければいいと、御遺骨の発見を願う気持ちは逆に、その地に御遺骨がないことを願う気持ちへと変わっていった。

それがいいのか悪いのかわからなかったが、その後はどうか御遺骨がありませんようにという気持ちで必死に作業をした。御遺骨をお迎えすることの意味はとてもとても重かった。

今まで学校等で戦争について勉強してきたけれど、こんなにも直接的に感じたことはない。

会いたいと願っても叶うことなく潰えた数々の人の想いは、たとえ御英霊のすべてが御家族の元に戻られても消えることはない。その想いの尊さを知り悲しみの深さを知った。

私達は普段、世界で起こっている紛争やテロのニュースに触れ胸を痛める。しかし、次から次へと溢れてくる情報へと気持ちは向き、胸を痛めたことすら忘れてしまえる日本を生きている。

私は私のために、過去や現在の戦争の真実に目を向け、もっと怒り悲しんでいきたいと思う。そこから平和を願う私自身の言葉が生まれ、いつか誰かの心に届くかも知れない。沖縄派遣での体験は、私のこれからに大きな影響を与えていくことは間違いない。

◇　◇　◇

平成21年度政府主催遺骨収集実施予定

◆旧ソ連抑留中死亡者遺骨収集

・ロシア　ハバロフスク地方応急派遣
（7月27日～8月10日）

・ロシア　ハバロフスク地方
（8月20日～9月8日）
・モンゴル（ノモンハン）
（8月30日～9月15日）

◆南方戦域戦没者遺骨収集

・硫黄島（調査・収集）
（7月1日～7月16日）
（10月4日～10月22日）
（11月29日～12月17日）
（2月14日～3月5日）
・インドネシア
（9月29日～10月15日）
・フィリピン
（11月17日～12月1日）
・東部ニューギニア
（11月26日～12月14日）
・ビスマーク・ソロモン諸島
（1月18日～2月4日）
・沖縄（自主派遣）
（2月上旬～2月中旬頃）

事務局からの報告等

○評議員会・理事会の開催

平成21年4月14日及び16日、当協議会の平成21年度第1回評議員会及び同理事会をそれぞれ開催した。

両会議は、山本会長出席の下、新年度の事業計画の説明、新公益法人移行に関する当協議会の取組方針及び慰霊顕彰に関する政府への要望等、今後の活動方針に関わる重要案件を含み、事務局からの提議について熱心な討議が交わされた。その結果、事務局案は、それぞれ原案どおり承認された。

◇評議員会

（開催月日）
平成21年4月14日（火）
（開催場所）
千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会会議室
（出席者）
評議員14名全員（委任状出席4名を含む。）、他に山本卓眞会長、竹之下和雄監事、柚木文夫理事長（事務局）
（議長）
奈良保男評議員
（主要審議事項）
① 平成20年度事業報告
② 平成20年度決算報告
③ 平成21年度事業計画
④ 平成21年度予算計画
⑤ 新公益法人移行の取組について
⑥ 協議会役員等人事（7月8日付け）について
ア 菅原道熙理事の退任と新理事として藤田幸生、若木利博両氏の選任
イ 備後嘉雄評議員の退任と持田修氏の新任（事務局）

◇理事会

（開催月日）
平成21年4月16日（木）
（開催場所）
千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会会議室
（出席者）
理事11名（委任状出席者5名を含む。）、他に竹之下和雄監事、事務局若木利博
（議長）山本卓眞会長
（主要審議事項）
① 平成20年度事業報告
② 平成20年度決算報告
③ 平成21年度事業計画
④ 平成21年度予算計画
⑤ 新公益法人移行の取組について
⑥ 協議会役員等人事について（略）

○参加団体連絡調整会議の開催

当協議会では、首都圏所在の正会員団体による連絡調整会議を年2回予定しているが、その本年度第1回の連絡調整会議を、次のとおり開催した。

（開催月日）
平成21年5月11日（月）
（開催場所）
千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会会議室
（会議出席団体）
（財）海原会
英霊にこたえる会
神奈川県偕行会
興亜観音を守る会
埼玉偕行会
全ビルマ会
（財）千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会
東京都郷友会
東京ヤゴダ会
（財）特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
（NPO法人）JYMA
（主要協議事項）
① 平成21年度の当協議会事業計画について
② 「戦没者慰霊」要望活動の今後の更なる展開について（「戦没者慰霊顕彰事業の現状と問題点」（別掲）等）
③ 本年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の実施について
本年度の合同慰霊祭実施要領について、当協議会が準備中の計画の概案を説明し、各団体の意見・要望を求めたところ、活発な意見交換が行われた。今後、参加希望者の処遇について齟齬のないよう、各団体との連絡調整を更に密接に行うこととした。
④ 各団体からの意見等
各団体の現況と今後の慰霊事業の在り方、特に慰霊顕彰事業を国の事業と

して明確に位置付けるための運動の進め方について、広く意見を交換すると共に、海外にある慰霊碑の現況と今後の維持管理、遺骨収集の現況と今後の方向性についても切実な意見が述べられた。これら多くの課題について、今後引き続き検討し、協力して行くことを約した。

○英霊座談会（正論）への協力

◎『正論』7月号（6月1日発売）
企画座談会（主催・日本会議）

◎出席者
・山本卓眞氏（富士通名誉会長、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会会長）
・衛藤晟一氏（参議院議員、日本会議国会議員懇談会政策審議会長）
・野口　健氏（アルピニスト）

◎開催場所・参議院議員会館第二会議室

◎座談会テーマ「危機に立つ戦没者追悼―国は戦没者追悼に責任をとるべきだ」

平成21年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のお知らせ

当協議会は、参加諸団体と共に、本年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を、来る7月4日（土）12時から靖國神社において催行いたします。

会員の皆様には、既にご案内が届いていると思いますが、その他のご参拝希望の方は、電話又はFAXでご連絡下さい。

（連絡先）
（財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局
電　話　03―5730―0421
FAX　03―5730―0422

（参考）参加費用
玉串料　二〇〇〇円
直会参加料（参加者のみ）　五〇〇〇円

財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会新年度役員等一覧（5月31日現在・一部7月8日付け）

（あいうえお順）

名誉総裁　三笠宮崇仁親王殿下
会　長　山本　卓眞
副会長　岩下　邦雄　齋須　重一
理事長　柚木　文夫
理　事　秋上　眞一　馬野　猛彦
小田原健児　夏川　和也
福田　一彌　藤田　幸生
村木　鴻二　若木　利博
監　事　植田　弘　竹之下和雄
評議員　赤木　衛　新井　光雄
新井　剛　池邑　正男
菊地　勝夫　倉谷三男四郎
栗原　宏　冨田　定幸
奈良　保男　野口　清秀
藤原　博　松島トモ子
持田　修　森田　次夫
顧　問　板垣　正　大久保　隆
下山　敏郎　新庄　鷹義
羽佐間重彰　堀江　正夫
相談役　（財）偕行社副会長
（財）水交会会長
つばさ会会長
参　与　寺島　芳彦　横溝　潔

財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会正会員団体一覧（5月31日現在）

（あいうえお順）

（財）海原会（会　長　前田　武）
英霊にこたえる会
（会　長　中條　高徳）
鹿児島偕行会（会　長　矢崎　晃）
神奈川県偕行会
（会　長　荒井　和彦）
旧戦友連　（代　表　佐藤　博志）
近畿偕行会（会　長　野上　五夫）
群馬偕行会（会　長　新津　保義）
興亜観音を守る会
（会　長　中村　粲）
（NPO法人）JYMA
（理事長　赤木　衛）
埼玉県偕行会（会　長　小山内昭三）
佐賀県偕行会（会　長　江口　浩）
震洋会　（会　長　上田恵之助）
全ビルマ会　（会　長　菅野　廉一）
（財）太平洋戦争戦没者慰霊協会
（理事長　岸田　敏夫）
（財）千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会
（会　長　宮下　創平）
筑後地区偕行会
（会　長　首藤　愛明）
東京ヤゴダ会（会　長　藤井弥五郎）
東京都郷友会（会　長　矢部　廣武）
（財）特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
（会　長　山本　卓眞）
特攻殉国の碑保存会
（事務局長　西村　金造）
豊橋歩兵第十八聯隊戦友会
（代　表　伊奈作一郎）
姫路偕行会　（会　長　小林　繁）
福井県偕行会（会　長　浅野　一行）
宮崎県偕行会（会　長　川野　周平）
予科練雄飛会（会　長　堺　周一）
陸士第五十七期同期生会
（代　表　今井五十二）
全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会
（会　長　糟谷　勝美）

暑中お見舞い申し上げます

財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

名誉総裁　三笠宮崇仁親王殿下
会　長　山本卓眞
副会長　岩下邦雄
同　齋須重一
理事長　柚木文夫

財団法人　偕行社

会　長　山本卓眞
副会長　齋須重一
同　塩田章
同　志摩篤
理事長　福田一彌
事務局長　菊地勝夫

財団法人　水交会

会　長　林崎千明
理事長　夏川和也
副理事長　袈岩壮吉
専務理事　藤田幸生
事務局長　池邑正男

準正会員団体

熊本歩兵第二二五聯隊戦友会
全国甲飛会
全国近歩一会
山口県偕行会（会　長　坂本　強）

新入会員及び寄付者（敬称略）

（3月1日～5月31日）

【正会員】

佐賀県偕行会
旧戦友連

【賛助会員】（あいうえお順）

森田次夫　碓井克典
佐藤博志

【寄附者】（あいうえお順）

緒方威　上土井佐喜子

航空自衛隊退職者団体　つばさ会

会　長　村木鴻二
副会長　津曲義光
同　杉山弘
同　横幕功
同　山本修三

栗原宏　田尻浩
野田誠作　福場博
山口春治

会報「慰霊」第13号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

（訂正箇所）

3頁　3段目後ろから11行目
誤「湯浅貞氏」
正「湯澤貞氏」

5頁　2段目前から10行目
誤「音禰古丹海峡」
正「温禰古（オネコタン）丹海峡」

8頁　3段目前から6行目
誤「輪唱」
正「伝承」

9頁　1段目本文2行目
誤「ヤゴタ会」
正「ヤゴダ会」

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、慰霊事業の永続をはかるため、なるべく多くの方々の会員ご加入をお待ちしております。

皆様のご協力をお願い致します。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

一　賛助会員
（本会の趣旨に賛同する個人）
年会費　三〇〇〇円

二　賛助特別会員
（特別ご芳志の賛助会員）
年会費　五〇〇〇〇円

三　正会員
（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体）
年会費　一〇〇〇〇円

四　特別会員
（本会の趣旨に賛同する法人・団体）
年会費　五〇〇〇〇円